

児童家庭支援センターによるヤングケアラー支援の実施および検証事業総括：大分

児童家庭支援センターゆずりは

昨年に続き、当事業が実施できたことは大変ありがたく、嬉しかったです。今回改めて支援した世帯について考えたとき、脆弱な世帯は、長期的に関わる中で子どもの成長に伴いヤングケアラーとして家族を支えるようになるのだということを実感しました。

今回、支援した世帯は各関係機関がとても丁寧に、良好な関係性の中で支援を続け、都度、家族の変化を喜び、励ましあいながら支援してきました。しかし、ここにきて子ども3人の卒業、入学を控え、制服が購入できないかもしれないという危機に陥りましたが、当事業によって無事準備することができました。保護者を含む支援者皆で、手をたたいて喜んだと同時に胸をなでおろしました。

支援者の間で頭を悩ませるのは経済的な問題であり、一番難しく、一番必要な支援だと思います。しかし、この事業を通じて、各支援機関と協議しながら本当に必要な世帯に、本当に必要とする用途で実施できたことにとっても感謝しています。子どもが当たり前を諦めることにならず本当によかったです。

当事業から学んだように幼児期・学童期からの支援であっても、長期的にはヤングケアラー化する可能性があるという視点を持ち、子どもたちに何を教え、どのように支援するのかを検討し続けたいと思います。

こどもセンターPanem

今年度、ヤングケアラー支援として、3ケースの家庭を中心に支援をしてきました。1つ目のケースは、対象児童が受験生であったため、ショートステイを利用した際に一緒に問題集や参考書を探しに行き、購入をしました。また、文房具など、学習道具を購入し、提供したことで、学習に対して少し前向きな様子が見られるようになりました。一緒に買い物などに行くことで、車の中で家庭の困りなどを話してくれるようになり、対象児童の気持ちや家族全体の困りなどを知ることが出来、児童相談所など、他の機関の支援が入ることに繋げることが出来ました。一旦、分離が必要な状況になったため、このケースについては、支援が年度途中で終了することになりましたが、ヤングケアラー支援の助成があったことで、家族の困りを引き出すことに繋げることが出来たように思います。

2つ目のケースについては、家庭の状況を鑑みて、衣服、誕生日プレゼント、クリスマスプレゼント、テーマパークへの外出等の提供を行いました。普段、色々なことを我慢していたり、経験が無かったり、家庭で安心して生活出来る状況では無い中で、楽しい気持ちや時間の提供が出来たように思います。このケースに関しても、家庭での養育が難しくなったため、家庭分離となり、年度途中で支援の終了となりました。

3つ目のケースについては、高3の児童が家事や下の子のお世話を全面的に行っている家庭であり、対象児が休息をしたい希望があり、ショートステイの利用に繋がりました。ショ

ートステイ利用時に落ち着いた時間を取れるための玩具（パズル）を購入しました。

今年度もヤングケアラー支援をさせていただく中で、物資の提供等の土台があることで、買い物に一緒に行ったりなど、職員と特別な時間を過ごす中で、子どもらしい訴えを聞くことが出来たように思います。その子どもの思いを聞くことで、次の機関や支援に繋げることが出来ました。また、これまでヤングケアラーという視点で見て居なかった所の視点を変えていくことで、見えてきたものがたくさんあるように思います。本事業を通して学んだことを、今後の支援でも活かしていきたいと思います。

児童家庭支援センター「和（やわらぎ）」

この事業を通じて、ヤングケアラーの理解が進み、支援の手応えを感じることもあったが、改めて支援していくことの難しさや葛藤もうまれた。

昨年度より継続して支援することで、その家庭や子どものニーズが把握でき、今年度は受験生でもあったので、塾の費用を支援し、本人にとってはこれまで行ったことのない「塾」という場所に週2日通うことができた。英検準2級に合格して自信を持ったり、無理だと思っていた志望高校への受験に向けて準備することができている。また、家族がわたしたちの支援を受け入れるようになり、小さなことで頼るようになってくれたため、子どもの負担を減らすことはできてきたが、一方で家族間の関係性が見えるようになり、ヤングケアラーが日々家族のために我慢して過ごしている姿や、親に自分の希望を伝えても「あなたはこれをしないとイケないでしょ」「これはすぐには無理だから」と受け入れてもらえず、希望を失っていく場面に遭遇することも何度かあった。同年代の子どもであれば、親から当然してもらえるようなことであっても、それをしてもらうことができず、静かに涙を流す場面を見ることもあった。

いくら私たちが希望を叶えようとしても、それについては「大丈夫です、いいです」と拒否をし、本当にわかってもらいたいのは親であり、受け入れてもらいたいのは親であるということを感じさせられた。そんな中でどういった支援ができるのか考えていくと、親に私たちがヤングケアラーの代弁者となって希望を伝え、それを親と一緒に考えたり、行動に移す作業を支えていくことができるのではないかと思い、実行してみることにした。ヤングケアラーが親にしてもらいたいことを私たち支援者が間接的に介入して、制度を利用したり、環境を整えたり、親と一緒に実現していった。少しずつ効果は出てきており、一時は虐待のリスクも高まっていた親子関係も修復されつつある。

ヤングケアラー支援はヤングケアラーだけを支援するのではなく、家族などその環境へアプローチすることも大切であり、また物質的な支援だけでなく、気持ちの受け止めなど心理的支援もとても重要であると感じた。